



令和4年11月6日、北海道医師会創立75周年記念行事にて、元北海道日本ハムファイターズ斎藤佑樹氏が『継続することの大切さ』というタイトルで講演を行った。高校・大学と華々しい成績を収めたのち、苦悩のプロ野球選手時代を経て、子供たちへの教育という現在の夢に至るまでを自身の言葉で話された。中でも、プロ野球選手時代に受けた教育・指導についての話に多くの時間を割き、現日本代表監督である前ファイターズ栗山英樹監督は、「一人一人との対話を非常に大切にし、「選手に成長してもらいたい。人生にとって大切

Teaching is Learning.

情報広報部副部長

寺本 瑞絵

また、2004年にスタートした初期臨床研修

なものを見つけていってほしい」という教育者の視点を持つ監督であったと語られた。監督との相互関係から構築した経験が、現在の夢である子供たちへの教育につながるっており、ゴールからさらに学びを見つける新しい教育の在り方を感じさせた。

Doctorの語源はラテン語の『Docere:教える』である。語源が示すように、医療の現場は教育という行為にあふれている。伝統工芸のような職人の世界において、弟子は、師匠の仕事を見て技を盗み、まねて学んできた。医療においても、こと手術教育は、見て学ぶ

時代が長かったのではないだろうか。また、知識に関しては、授業を含め、教師主導型の一方指導が多かったと思われる。

医学部教育は2000年代から激しく変化している。医学教育モデル・コア・カリキュラムが作成され、シミュレーション教育が開始された。2005年にはOSCE (Objective Structured Clinical Examination:客観的臨床能力試験) によるシナリオに従った臨床能力スキルを問う試験が導入された。近年は医学教育を国際基準で評価し、その質を高めていくことを目的に、日本医学教育評価機構(JACME) からの

適合認証を受ける大学も増加している。

制度により、医局を中心とする社会民主主義型ともいえる医療提供体制は、新自由主義型へとシフトした。医療も、多角化、個別化、主体化が進んでいる。近年では働き方改革や医療DX化により、医療現場や、理想の医師像にも変化がみられる。医師は不眠不休で患者に尽くすのが当然で、上司より長く病院に残るのが当たり前とされていた時代から、多様性を重んじ、自分らしいキャリア、仕事の効率向上とプライベートの両立を求める時代へと変化している。教育者・指導者は、医療も、それを学習する者もその背景も、変化し

ていることを受け止めながら、その変化に対応する必要がある。

そもそも、多様性があり、モチベーションも背景も異なる者にどのような教育が望ましいのだろうか。明確な目標設定、妥当性や信頼性が高く実現可能な評価法、効果的なフィードバック法、学習者の興味や関心の引き方など、様々な方法論や技法が研究・開発されてきた。指導者目線のモデル開発が中心であった指導法は、徐々に学習者目線、もしくは、教育者と学習者の共同体(相互関係)の中でのように構築されるのかという構成主義へ方向転換している。教育者には、知識やスキルの伝達という枠組みを超えて、なぜ教育をするのか、何を大切に教育するのか、これまでの経験を活かすどのように指導するのか、などの価値観や哲学を持ち、学習者の状況に合わせて適切に教育することが望まれる。さらに、教育者には、組織を作り人員を配置して計画や予算を策定・管理するマネジメント能力、ビジョンの実現に向けて人々を啓発し変化を取り扱うリーダーシップや寛容性が望まれるが、求められる態度や価値観は、時代や社会によって変化していく。

『生き残る種とは、最も強いものではない。最も知的なものでもない。それは、変化に最もよく適応したものである』チャールズ・ダーウインの言葉である。医学教育も同様である。教育・指導は学ぶほどに奥が深く、単一の物差しや唯一解はない。教育者もまた、生涯学び続ける学習者であろう。